

## 9. 夏どりイチゴの栽培法

一苗の大きさ、植付時と秋トンネル効果

(園試野菜・花き部)

夏どりいちごの増収対策として、大苗使用(30g)、9月初旬植え、秋トンネル被覆(10月上旬から12月上旬頃まで)する技術の知見が得られた。適応地域は、標高300m以上、多雪地帯(根雪終り4月中旬以降)

### (1) 背景とねらい

露地イチゴの収穫が終る6月下旬以降は、全国的にも不足の時期である。この頃のイチゴの利用は生食用より業務用としての需要が高いため、果実の日持ちがすぐれ、大きさも10~15g程度のものが望まれている。

西和賀地域は融雪が遅れることにともない、6月下旬~7月中旬収穫とかなり遅出しが可能で有利販売できるが、栽培的には全般に低収で灰色カビ果が発生しやすいなどの問題点も多い。

ここでは増収対策を主体に西和賀地域で現地試験を実施したか、その成果が得られたので普及奨励事項としたい。

### (2) 技術内容

1) 植付苗は30g前後の大苗を使用する。

2) 植付適期は慣行より15日程度早い9月初旬頃である。

3) 花芽分化期間の延長をねらいとした秋トンネルの増収効果は顕著で、特に後期収量が著しく向上する。この場合の苗の大きさは大苗、中苗でよい。

トンネルの被覆期間は最低温度が5~6℃になる10月上旬頃から根雪始めの12月上旬頃までとする。

4) 適応地域、標高の高い(300m以上)多雪地帯(根雪終り4月中旬以降)

### (3) 普及上の留意点

1) 増殖用の親株を2~3割程度多くし、1~2番ランナーを中心に大苗を育成する。

2) トンネルの被覆方法は夜間ポリフィルムに保温資材(シルバーポリトウなど)の併用で保温をはかるが日中トンネル内が15℃以上の場合はトンネルを開放する。

### (4) 当該事項にかかる試験研究課題名

夏どりイチゴの栽培法

### (5) 参考文献 資料

昭和55年、56年、57年岩手県園芸試験場試験成績書

### (6) 試験成績の概要

1) 試験課題名 夏どりイチゴの栽培法

2) 試験年次および場所 昭和55~57 和賀郡沢内村字高下

3) 試験方法

(ア) 供試条件

① 植付苗の大小 (昭和55年)

苗の大小	全 重	葉 数	クラウン径	備 考
大 苗 区	27.2 g	4.0 cm	0.95 m	1番ランナー使用
中 苗 区	14.0	3.4	0.83	2番ランナー使用
小 苗 区	5.2	2.6	0.51	3番ランナー使用

※ 植付時期 9月11日

② 植付期間 (昭和55~56年)

植付時期を9月1日(3日)、9月11日(10日)、9月21日(20日)とし、2番ランナー仮植の中苗で検討した。55年の植付時の苗の大きさは、それぞれ12.2g、14.0g、14.4gの苗を使用した。56年度は未調査。なお( )内は56年の植付時期。

③ 秋トンネル効果 (昭和56~57年)

被覆期間と収量

処理区	被覆期間	備 考
56年 短期被覆区	10月1日~11月10日	使用苗の大きさは中苗(2番ランナー)を使用し9月10日植とした。
長期被覆区	10月1日~12月4日	
無処理区	-	

苗の大小と被覆効果

処理区	備 考
57年 大苗 被覆区	大苗区は、9月8日、中苗区は、9月14日に植付けた。
無処理区	
中苗 被覆区	苗の大きさは大苗区3.8葉、中苗区は2.8葉展開苗を使用
無処理区	

- (イ) 1区面積および区制 55年、56年 1区 9㎡ (40株) 1区制  
57年 1区 18㎡ (80株) 1区制

(ウ) 供試品種 盛岡16号

(エ)④ 秋トンネルの被覆方法は夜間ポリフィルムにシルバーポリの2重被覆とし、日中は15℃前後で換気した。

(オ)⑤ 耕種概要

施肥量 (kg/a) 基肥 堆肥 300 てんろ石灰 20  
N-1.5 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-3.0 K<sub>2</sub>O-1.5  
N-0.64 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-0.16 K<sub>2</sub>O-0.64

栽植様式                   うね幅 150 cm、株間30cm、2条植 (a 当り 444 株)

#### 4) 試験結果

(ア) 8月始めに仮植した1番、2番、3番ランナー苗を、それぞれ大中小苗として9月11日植で検討した。

a 当り収量は大苗区が183.3 kgで最も高く、中苗区より15%程度まさったが、小苗区は著しく減収した。

時期別収量でも、大苗区の後期収量は明らかに高く、7月の収量比が中苗区の119%、小苗区の127%であった。

このことは、植付時期が多少異なるものの、57年の苗の大小の比較でも同様の傾向がみられた。

植付苗の大小と果重との関係では、1個平均重でほとんど差は認められなかったが、大苗区は10g以下の小果がやや多い傾向がみられた。

#### (イ) 植付時期

慣行の9月20日前後の植付期に比べ、9月始めと植付期を早めることにより55年は24%、56年は11%収量がまさった。

この増収効果は特に後期収量で高く、55年の7月収量は慣行区比で148%の収量比を示し、56年も7月の中下旬の収量比が122%とまさった。

果重は大苗区同様早植区で10g以下の小果が多かったが、これは収穫後期ほど果実の肥大が低下するためこれら区の後期収量が高いことを示している。

#### (ウ) 秋トンネル効果

イチゴの花芽分化は温度的には17~18℃から5℃の間で行なわれているが、秋トンネルにより花芽分化期間の延長と花芽の充実を図ろうとした。トンネルの被覆期間と収量との関係では12月4日の根雪始めまで実施した長期被覆区が11月10日打切り区の127%、無処理区148%と高い収量比を示した。

引きつづいて57年は植付苗の大小と秋トンネル効果について検討したが、トンネル被覆により大苗区が132%、中苗区が149%の収量比で苗の大小にかかわらず秋トンネル効果の高いことを示した。特に中苗区でその効果が顕著で秋トンネル被覆により中苗区が大苗区をやや上回った。このことは秋トンネル被覆後中苗区の生育が大苗区より促進されたことから一番ランナーを使用した大苗と2番ランナーを使用した中苗の苗素質の差と思われる。

この増収効果は特に後期収量で著しく、57年の7月の後期収量は無処理区より40%前後も高かった。

秋トンネルと果実の大きさとの関係では、前述の試験I、II同様後期収量が高いことにもない1個平均重はやや下回る傾向がみられた。

以上の結果、冬期間長く雪の下におかれ、遅出しをねらう夏どりイチゴの栽培法は、大苗を早植し越冬前の株を充実させることが大切である。

また、これら地帯は秋の花芽分化期間も短いため秋トンネルにより花芽の確保と充実を図る効果が大きい。